

世界ジオパークネットワーク申請候補地域

現地審査報告書

1. 室戸
2. 秩父
3. 山陰海岸

室戸 現地審査報告書

高木秀雄・加藤禎一、原 英俊(事務局)

審査日程 平成 21 年 8 月 28～29 日

主な案内者(敬称略)

小松幹侍(室戸ジオパーク推進協議会会長:室戸市長)、横田壮一郎(同副会長:高知県議会議員)、島田信雄(同副会長:室戸市観光協会会長)、田中圭一(同事務局:室戸市企画財政課)、吉倉紳一(高知大学副学長)、村山雅史(高知コアセンター)、永野正展(高知工科大学)

見学地点

高知コアセンター、西山大地(中位海成段丘)、キラメッセ室戸鯨館、行当岬サイト(砂岩岩脈・漣痕等)、最御崎寺・室戸岬灯台、シレストむろと、日沖枕状溶岩、アクアファーム、室戸岬サイト(タービダイト・斑れい岩)、吉良川町町並み、国立室戸青少年自然の家

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

- ・ ジオパークのコンセプト「海と陸が出会い、新しい台地が誕生する最前線」が、シナリオとしてかなり明確になってきた事は評価される。過去の付加体を観察でき、現在進行形の付加体の情報を高知コアセンターで得られる。陸から海への付加体の様子を、アクティブに理解できる。
- ・ ジオサイトとして、付加体の特徴を示すメランジュやチャート-碎屑岩シークエンス(海洋プレート層序)が必ずしも含まれていない。世界的にみて、室戸市域のみで四国太平洋岸の付加体等の特徴をあますところなく代表するのは無理がある。
- ・ 中新世斑レイ岩は、岩石学的に典型的なすなわち教科書的な組織を呈し見学する価値は高い。しかし、室戸半島火成活動帯の一員であるとする位置付けや、その背景をなす前期中新世におけるフィリピン海プレートの沈み込みに伴う四国前弧海盆海嶺の活動との関連など大局的な地質学的位置づけが充分説明されていない。
- ・ 水問題は、世界的な問題である。深層水の淡水化をもっとアピールしても良い。
- ・ 地質学的意義を持つジオサイトの数は充分ありえるが、名称のみの看板が若干あるものの、一般向けの説明があるサイトはほとんど現時点ではない。現地案内板(QRコードを用いて5ヶ国語対応可)や行当岬の新遊歩道設置は、既に予算化され、一部は発注済みであり年度内にその実現性はきわめて高いが、現時点では具現化していないため、原案の例示はあったものの現物のチェックは不可能だった。これは、重要な評価対象であり、早急に整備し、その上で事前の現地評価を受ける必要がある。
- ・ 付加体・段丘・地震・断層・深層水、ジオのストーリーをどう明確に伝えるか考えて欲しい。それに伴い、時系列を追った概念図などを整備して欲しい。

2) 教育・研究活動

- ・ 論文等は相当数あると思われるので、それらのリストアップが必要である。
- ・ 来年度から室戸高校において3年生を対象に「総合学科」に「ジオパーク学」を設置することは高く評価されるが、他の世界ジオパーク地域でも小学校からそうした教育プログラムを実施しており、一層の充実と実績の蓄積が必要である。

3) 管理運営体制

- ・ 運営協議会はあるが、担当の常勤職員や専門家スタッフの整備が、格段に必要である。

4) 地域の持続可能な発展とツーリズム

- ・ 広報活動の一環として各所におけるポスター・パンフレット・のぼり等による「室戸ジオパーク」の広報活動は盛んに行われている点は評価される。一方、外国語表示とともに、次の展開(これらを見てビジターをジオサイトにどのように誘導するかなどのアプローチ)についてはまったく不十分で工夫が必要である。
- ・ 室戸市の連携によってジオガイドの育成も図られ、既に6人のガイドが養成され(一部市職員)、そのうち3人が英語対応できることは評価される。
- ・ ガイドのいないツアーの場合の、Self-guided tour の仕組みとその方向性を作り上げる必要がある。
- ・ 特徴的な段丘のくさり礫採集や企業の採石時に付随する石灰岩ノジュールを利用した化石採集など、子供達にも関心の高い活動も随時行っており、日常的なジオの活動を実施しているが、具体的なジオサイトとして設定されていない。

5) 国際対応

- ・ 英語対応のガイドは優れていた。
- ・ HP 英語版が未整備で、緊急不可欠に整備されるべきである。

6) 防災・保全

- ・ ジオサイトの安全性確保が、必ずしも充分でないところ(例えば、枕状溶岩ジオサイト)があり、申請前に(少なくとも現地審査以前)手すり等を整備しておくことが、不可欠である。

秩父 現地審査報告書

町田 洋・瀬古一郎、原 英俊(事務局)

審査日程 平成 21 年 7 月 21～22 日

主な案内者(敬称略)

新井秀弘(秩父市ふるさと創造課)、宮城 敏(秩父市ふるさと創造課)、中谷 亨(NPO 秩父まるごと博物館)、吉川國男(NPO 野外調査研究所理事長)、堀口萬吉(埼玉大名誉教授)、本間岳史(埼玉県立さいたま自然の博物館)、坂本 治(埼玉県立さいたま自然の博物館)、柳井修一(社団法人国土政策研究会)、松埜 緑(社団法人国土政策研究会)

見学地点

さいたま自然の博物館、虎岩、岩置、親鼻の紅れん石片岩、栗谷瀬橋の蛇紋岩、前原の不整合、大塚古墳・飯塚招木古墳、中津峡、秩父鉱山・ニッチツ(株)鉱物標本室、ようばけ、秩父ミュージックパーク、武甲山資料館

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

- ・ サイトは非常に多く魅力もある。ただしジオサイトをつなげる全体のテーマがない。興味深いシナリオ・ストーリーをどう作っていくかが重要である。
- ・ 日本の地質発祥の地は、重要なキーワードになりうる。ぜひ秩父から始まった地質研究がどう発展したか、また地質の時代論・成因論はその後どのように、またなぜ変わったか、について良い説明が欲しい。同時にそうした地質学の発展が世界のそれと比較してみる視点が欲しい。
- ・ 全体を通じて、地質地形の説明資料・マップ類が不足気味で、現地の説明板や案内板も破損・汚れ・一部間違いが見受けられた。多数のジオサイト～博物館・資料館とのネットワークも充分ではない。
- ・ これから案内板の整備を行っていく上で、是非簡単な説明を加えて欲しい。例えば、変成岩の岩石名をいきなり挙げても、一般の人は拒絶反応を起こしてしまう。変成岩が出来たときの温度や深さに関してもっと説明するなど、具体的でストーリー性を持たせて欲しい。
- ・ 地元での運営組織の内容・質が、ジオパークにとって重要なウエイトを占める。これからやるのではなく、実績が大切な要素である。申請書によるとジオツアーのこれまでの実績では民俗や文化・歴史に中心があり、ジオはほとんど含まれていないことは問題である。
- ・ 申請書は、審査項目を意識して、少なくとも項目毎に分けて書いて欲しい。申請書において、ストーリー性が乏しいのが一番の問題である。

2) 教育・研究活動

- ・ 秩父学は、地元とのタイアップにおいて良いことである。
- ・ 埼玉自然の博物館の活動は実績があり、ジオパークの拠点を予定しているが、ジオパーク推進との連携はまだとれていない。

3) 管理運営体制

- ・ 1 市 4 町と関係組織のワーキンググループを軸に、これから検討課題を具体化していく段階である。
- ・ 拠点にはジオパーク専門の学芸員はまだおいていない。

4) 地域の持続可能な発展とツーリズム

- ・ ジオパークのわかりやすいウェブサイトを早急に作る必要がある。そしてウェブページには、ストーリー性に富んだ内容を作成し、頻繁に更新していくことが必要である。

5) 国際対応

- ・ 博物館の展示や案内板などでは、多言語への対応が全く整っていない。

6) 防災・保全

- ・ 秩父のシンボルである武甲山の、営利のための石灰岩採掘による大きな変化は、自然保護の観点からはどう説明するか問題である。今後武甲山はどうあるべきか、いろいろな立場から活発な論議があつてよいのではないか。それを通じて環境倫理の考察が深まることを期待したい。
- ・ 一部の露頭はオーバーハングしていて落ちた巨岩もあり、危険防止の点からは観察点の位置の選定など考慮が必要である。
- ・ 河川管理は埼玉県の管轄で、長瀬などでは危険防止バリケードが置かれ、その設置・除去、堆砂の除去などは県の許可がいる。

山陰海岸 現地審査報告書

町田洋・中田節也、渡辺真人(事務局)

審査日程 平成 21 年 9 月 10～11 日

案内者(敬称略)

平井伸治(鳥取県知事)、林由紀子(鳥取市副市長)、榎本武利(岩美町長)、川上靖(鳥取県立博物館学芸員)、谷口進一(但馬県民局長)、長瀬幸夫(香美町長)、中貝宗治(豊岡市長)、三木武行(豊岡市ジオパーク普及啓発専門員)、馬場雅人(新温泉町長)、谷本勇(新温泉町ジオパーク調査専門員)、和田健(丹後広域振興局長)、中山泰(京丹後市長)、先山徹(兵庫県立人と自然の博物館主任研究員)、三田村宗樹(大阪市立大学)、西田良平(放送大学鳥取学習センター所長)、岡田昭明(鳥取大学)ほか

見学地点

琴引浜、琴引浜鳴き砂文化館、郷村断層、コウノトリ文化館、玄武洞、猫崎半島、竹野スノーケルセンター・ビジターセンター、淀洞門、下浜足跡化石、但馬御火浦、山陰海岸ジオパーク館、浦富海岸、福部歴史資料館、鳥取砂丘

現地審査のまとめ

1)ジオサイトと保全

ジオサイトが多数あり、岩石、地層、地形の多様性に富んでいる。日本からの GGN 申請地域としてふさわしいジオサイトを含む。「日本海の形成」をテーマとして、それらのジオサイトの学術的な位置づけが進んでいる。ただし、「日本海の形成」と野外で実際に見える物をどうわかりやすく関連づけるかなど、一般向けのわかりやすいストーリーと説明という点に関して改善の余地が大きい。また、海岸や平野の地形、ジオと人間の営みとの関係に関する地形学的・第四紀学的なストーリーが不足している。説明板の整備も十分ではなく、既存の説明板にも内容の改善が必要である。保全に関しては、鳥取砂丘、琴引浜などで住民主体の清掃活動などが行われている。

2)教育・研究活動

ジオパーク内の地形・地層・岩石を対象とした研究は現状では必ずしも活発とは言えない。鳥取砂丘、豊岡市のコウノトリ、琴引浜などで地元住民児童向けの環境教育が行われている。また、地元児童向けにジオパークのジオサイトを利用した教育活動が行われている。ジオパークとしてのガイド養成プログラムが昨年から行われている。一部のサイトのガイドパンフレットはあり、ジオパーク全体の簡単なガイドマップもあるが、ジオパーク全体を網羅したガイドブックが必要である。

3)管理運営体制

但馬県民局が事務局となって、三府県の連携をとりつつあり、運営体制は昨年から大きく進歩した。しかし、一体としてジオパークを運営するには至っていない。鳥取県立博物館、兵庫県立人と自然の博物館の積極的な協力が得られており、事務局と一体の活動という意味ではまだ物足りない面はあるが、学術・教育面のバックアップ体制は大きく進展した。中期的な拠点の整備計画は

あるが、ジオパーク全体の整備計画の具体化はまだこれからである。わかりやすいwebsiteがあり、地元新聞・テレビ、JR とのタイアップ企画などマーケティング・広報活動が行われている点は評価される。

4)地域の持続可能な発展とツーリズム

単発的なジオツアーは行われている。説明板は一部のサイトにある。玄武洞では定常的にガイドの解説が聞けるが、それ以外のサイトでは単発的なジオツアーに参加しない限りガイドの解説はない。環境省ビジターセンター、鳥取県立博物館分館の山陰海岸学習館では、誰でも参加できる定期的なものと同体向けの野外活動プログラムが行われているが、ジオツアー的な内容の増強が今後の課題である。兵庫県浜坂町の最近開館した山陰海岸ジオパーク館がジオパークの中心的な拠点であり、鳥取県のジオパークセンター(今年整備開始)と山陰海岸学習館(リニューアル中)、京丹後市琴引浜文化館がサテライト的な拠点である。山陰海岸ジオパーク館には代表的なジオサイトのわかりやすい解説を示す、いくつかのテーマに即したモデルコースを提示するなどの改善が求められる。サテライト拠点にもジオパークの全貌がわかる展示が今後必要である。近畿自然歩道がジオパークを徒歩でめぐるためのよいインフラとなっており、今後ジオパーク事務局と協力して整備していくことになっている。自然環境の保全を観光・地場産業の振興につなげる、という点で豊岡市の「コウノトリツーリズム」が成果を上げている。

5)国際対応

ホームページ、ガイドブック、パンフレットの多言語化を計画中である。今後の課題である。

6)防災・安全

水害に対応したハザードマップが円山川流域にある。郷村断層を使った防災教育、城崎温泉の北丹地震後の復興のストーリーを街としてアピールするなど、地域の防災意識を高める活動はある。